パウル・クレー・センターがライヴ配信

2007年から開催されているパウル・クレー・センターの「マイスターコンサート」をオンラインで視聴する機会に恵まれたのは、コロナ禍における数少ない利点の一つだった。ベルンにある美術館でこのような一流の音楽会が催されていたとは、知らずにいたからだ。音楽監督のユリア・ヴァンサンによると、2月27日のライヴ配信では世界中から3529人が視聴し、フィードバックも活発に届いているという。

モーツァルト「ヴァイオリン・ソナタ第21番」のフリューゲルホルン版とシューマン「アダージョとアレグロ」を、セルゲイ・ナカリャコフがピアノのマリア・メエロヴィッチと繊細に美しく弾くのに聴きほれ、その後グリーグ「ヴァイオリン・ソナタ第3番」を弾く樫本大進の雄弁な音楽には、ストリーミングの壁を越えて心をわしづかみにされた。締めくくりはブラームス「ホルン三重奏曲」で、心が満たされた。

パウル・クレー・センターのライヴ配信から、ブラームス「ホルン三重奏曲」を演奏する樫本、メエロヴィッチ、ナカリャコフ（左から）

ルツェルン響とトーンハレ管

3月4日、ルツェルン交響楽団もエキサイティングなライヴ配信を行った。現首席指揮者のジェイムズ・ガフィガンが渡航規制でスイスに入れず、次期首席指揮者のミヒャエル・ザンデルリンクが代役を務めた。ブルッフ「ヴァイオリン協奏曲第1番」のソリストはマリア・ドゥエニャスで、コロナ禍でなければ昨年7月に日本でもリサイタルが予定されていた18歳のスペイン人だ。深く、太い音色で大胆にヴァイオリンを操り、高音まで美しく、常にエネルギーを放出しながら歌心を聴かせるので、途中でなぜかインターネット回線が何度も止まってしまったのは、彼女の波動が強すぎるのかと思ってしまうほどだ。最後は超絶技巧で輝かしく弾き終わり、「女版パガニーニか」と脳裏をよぎったら、アンコールはパガニーニ「24の奇想曲」第5番を選び、まさしく「悪魔が乗り移った」かのような超速度で弾ききった。

チューリヒ・トーンハレ管弦楽団もチャイコフスキー・ツィクルス第3弾録音と3月26日の無観客ライヴ配信に向けてリハーサルが進んでいたのだが、楽団員の近親者に陽性反応が出て、コンサートは中止となった。昨年2月には、トーンハレ管のエキストラに新型コロナ陽性者が出て、当日に演奏会が中止された記憶がよみがえり、無情な現状を再認識した。

チューリヒ歌劇場の配信

新演出配信のなかったチューリヒ歌劇場は、毎週末『Souvenir』とニコラウス・アーノンクールが指揮した公演など、過去の名演を配信した。4作とともに共通する彼の音楽の紡ぎかた、歌詞を立てた歌わせかたを懐かしく偲んだ。

3月5～8日はウェーバー《魔弾の射手》（1999年）で、アーノンクールのエネルギーがすごかった。ペーター・ザイフェルトが歌うマックスは、本格的ヘルデンテノールで、その太い声で敏捷に歌われるとエキサイティングだ。マリン・ハルテロスのエンヒェンもしっかりした声でぜいたくだ。アガーテ役のイルガ・ニールセンスは高齢だが、細やかな歌唱が上手く、声を粘土のようにていねいに扱う人だ。

3月12～15日はオッフェンバック《美しきエレーヌ》（1997年）で、題名役のヴェッセリーナ・カサロヴァはまだ胸声・頭声のチェンジがスムーズで、正確な歌唱と誇張しないコミカルな演技が自然だった時代だ。テノールはオペレッタにしては頼もしい声と軽やかな演技に注目するも、この8年後父親に撃たれて亡くなって南アフリカのデオン・ヴァン・デル・ワルトだ。アーノンクールの喜歌劇はとことん楽しむ姿勢が懐かしい。リリアン・ニキテアスが歌うオレステ、リザ・ラルソンのパルテオニスも出色。

3月19～21日はモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》（2001年）で、当時見のがしたチェチーリア・バルトリのドンナ・エルヴィーラが観られたのも、コロナ禍がもたらした数少ない幸運の一つだ。すさまじい怒りのエネルギーと共に登場するが、ドン・ジョヴァンニに裏切り続けられても、最後まで深い愛情と苦悩を表現し続けた。ロベルト・サッカはいまだ若い声でぜいたくなドン・オッターヴィオを聴かせた。当歌劇場専属歌手も、題名役のロドニー・ギルフリー、故ラスロ・ポルガーのレポレッロ、ドンナ・アンナのイザベル・レイやツェルリーナのリリアーナ・ニキテアス、マゼットのオリヴァー・ヴィドマーも上手い。サルミーネンは《魔弾の射手》のときより衰えが目立つ。言葉をていねいに歌えるテンポを選んでも、けっして間延びしないアーノンクールの指揮はさすがだ。当時の首席チェロ奏者の音色もほれぼれする。

3月26～28日配信のシューマン唯一のオペラ《ゲノフェーファ》（2007年）はストリーミングがなければ一生誤解したままだった。初演時はマルティン・クシェイの演出に、さくれ立った心がこの美しい音楽的完成度を楽しむのを妨害したようだ。題名役のユリア・バンセ、ゴーロ役のショーン・マッテーイ、そして音だけですべての感情を表現するアーノンクールの音楽作りに改めて脱帽した。